

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	原田 信
論文題目	『詩経』圖譜の基礎的研究——圖譜の繼承と展開——
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、中国最古の詩歌を集めた『詩経』についての歴代の図譜について考察したものである。『詩経』は漢代以来「経書」として尊重されて来たことから、歴代の注釈書は汗牛充棟の感がある。しかし、その注釈についての研究は主として「文字」をもってする注釈についてのものであり、各詩篇の詩句に関する「図譜」についてはほとんどなかった。文字による注釈が『詩経』の理解に不可欠であったのと同様に、歴代の図譜も古代の經典である『詩経』理解に資するために作られてきたものであるにも関わらず、その系統だった研究は無きに等しい状況が続いてきたわけである。申請者はこの点に着目して、漢代から中華民国初期までの『詩経』図譜の編纂者と編纂目的、内容の概略を逐一調査し、各時代における『詩経』図譜の特色を考察、その間の系譜をたどることによって『詩経』注釈史のうえで図譜の担った役割を明らかにしようとした。</p> <p>本論文の構成は、序章「本研究の背景と目的、方法」、第一章「歴代『詩経』図譜の概要と特色」、第二章「『詩経』図譜の形成と多様化」、第三章「『詩経』図譜の定型化と改編」、第四章「宋元『詩経』図譜の影響と消失」、そして結語からなる。</p> <p>まず序章では、研究の背景として、『詩経』の図譜が『詩経』注釈史の中で扱われなかっただけでなく、書籍史の分野でも、「小説」などの挿図本などが注目を集めてきたのとは異なって、十分に議論の対象とならなかった事象を指摘する。ついで図譜が『詩経』の注釈である以上、注釈として担った役割を明らかにする必要があるとして、そのためにはまず歴代の『詩経』図譜の実態を整理する必要があるとする本論文の考察の方向性を明示する。</p> <p>第一章では、漢代から中華民国初期までの『詩経』図譜 86 種の編纂者と編纂目的、内容の概略を整理し、各時代における『詩経』図譜の特色を考察している。</p> <p>漢から北宋の間では、歴代の各書目から鄭玄の『毛詩譜』以来の 20 種の図譜を拾い上げ、その大半が散逸していることから、文献に残る記述を根拠として概要を考察する。それによると、「図」は『詩経』の詩篇に想を得て描かれた絵画に過ぎず、『詩経』の考証や解釈を目的としたものでなく、「譜」は各詩篇の作成年代を示した鄭玄の『毛詩譜』を繼承するものであったとする。</p> <p>南宋以降になると現存する図譜の数は多くなり、その時代間の差異や繼承関係も明らかになる。南宋期に編纂された図譜は 9 種あり、そのうちの 2 種が散逸したほかは、後世に伝わった。南宋期の図譜はそれまでのものとは全く異なり、「図」は天文や地理、建物や土地などの制度、車馬・衣冠・祭器などの事物などを取り上げ、絵解きの百科図鑑の風の体裁を取るようになる。「譜」も鄭玄の『毛詩譜』と異なって、『詩経』の表現法や構成に関する内容が示されるようになることを指摘する。これは科挙の実施に従ってその学習のための参考書として民間の書肆が出版するようになったこと、また『詩経』の解釈にあたって自説を示すための必要性から生まれたものであることを指摘する。元代については、著者は 8 種の図譜の存在を見出している。そのうちの 2 種は散逸し、残りの 6 種は新たな図を付加するも、おおむね南宋の図譜に繼承し、これに解説に朱熹の説を援用するようになったことをいう。</p> <p>明代には 21 種の図譜の存在を確認し、その大部分の内容が宋元の図譜と重なるものの、永楽帝が編纂を命じた『五経』の一つである『詩経大全』の巻頭に「詩経大全図」が入れられたことによって権威付けられて世に広く普及することになったことを指摘する。清代において著者が調査した図譜の数は 28 種にのぼり、その内容は同治年間前後でまったく様相を異にすると指摘する。</p>	

同治年間以前では『欽定詩経伝説彙纂』の巻首の「詩伝図」がとくに広く普及するが、その他にも前時代の図譜によって改変を加えて翻刻されたことをいう。同治以降には江戸期の博物学の成果である岡元鳳の『毛詩品物図攷』が将来され、翻刻されて大きく変わったことをいう。

この第一章での調査結果を踏まえて、第二章では、南宋の楊甲の「毛詩正変指南図」（『六経図』所収）と、それに影響を与えた欧陽脩の輯佚整理本である『鄭氏図譜』を『詩経』図譜の原型とし、その後の宋・元時代の図譜はこれを原型として多様化していったものであるとの観点を提示する。そこで楊甲の「毛詩正変指南図」の編纂と構成を、現存する最古の明の万暦本に基づいて具体的に紹介し、この図譜が後世の『詩経』詩篇の理解に資するための数多くの図譜の原型になったことを明らかにしている。重要な指摘であるが、その背景に当時の古代文物への関心の高まりに言及することがあればさらに良かったであろう。南宋期に民間の書肆が刊行した『監本纂図互註重言重意互註毛詩』における「毛詩図譜」「四時伝授之図」や『毛詩図説』、「毛詩挙要図」は「毛詩正変指南図」に基づいて改編増補したりしたものであり、この流れは元代にも持ち込まれ、改編されながら多様化していく姿を数種の図譜を示すことによって考察している。

第三章では、明清の図譜を取り上げ、その定型化と改編の跡を追っている。その中で大きな存在となったのが永楽帝の命で編纂された『詩経大全』の付録「詩経大全図」であるが、これが元の蘆陵羅の『詩集伝名物鈔音积纂輯』と劉瑾の『詩集伝通积』らの図譜をそのまま踏襲したものであることを指摘する。清代では、康熙帝の時代に勅撰の『欽定詩経伝説彙纂』が編まれたが、図は永楽版のものをそのまま用い、解説部分は朱熹に代表される南宋の学者に意見によって改めているという。これを論者は明清における「改編」として詳細に検討し、その時代における学問的、また社会的な意味を明らかにしている。論者の考察の最も力点の置かれた箇所である。

第四章では、歴代継承されてきた図譜が次第に書物から消えていく状況と、新たに日本で刊行された『毛詩品物図攷』に注目が集まり、翻刻されるようになったことに言及する。

結語では、これらを総括して、「毛詩正変指南図」を原型とする『詩経』図譜が改編を重ねてきたこと、この過程でそれらが科挙の試験の学習用に供されて長く伝承されてきたが、清末になって日本から新たに『毛詩品物図攷』が将来されたことによって急速にその力を失っていったことなど述べてまとめとする。歴代の『詩経』図譜が挙業書であったという指摘はそのとおりであり、そうであるからこそ、それとは関わりのない『毛詩品物図攷』が純粹に『詩経』理解のための図譜として新鮮な思いで受け入れられたことは当然のこととすべきであり、この点への言及がなかったのは惜しまれるが、これは日本における『詩経』図譜との比較研究として今後に期待したい部分である。

中国における歴代の大量の『詩経』図譜を掘り起こし、時代を追って整理して系統だて、その注釈史上の意味を考察した本論文は、この方面の研究としては嚆矢に属するものであり、基礎的研究ながら労作と評価できる。考察においてなお未消化な部分は残るものの、長い伝統のある『詩経』研究に新たな可能性を開いた論文として、博士学位を授与するにふさわしいものである。

公開審査会開催日	2017年 5月 27日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	稲畑 耕一郎	中国古典詩文	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	岡崎 由美	中国明清小説	
審査委員	慶應義塾大学文学部・教授	高橋 智	中国書誌学	博士(文学)慶應義塾大学

